

与惣九郎の見た大蛇（篠山町）

むかし、むかしのことです。丹波の古佐の与惣九郎〈よそくろう〉という人が、信濃〈しなの〉の国（長野県）の諏訪神社〈すわじんじゃ〉へお参りしてその分霊〈ぶんれい〉（建御名方命〈たけみなかたのみこと〉の妹）をいただき帰ってきました。

今のわたりせ橋のあたりまで来た時のことです。それまでずっと後へついてきていた一人の女の子が急に立ち止まったかと思うと、身をおどらせて、下の篠山川へとび込みました。おどろいた与惣九郎の目には、もう女の子の姿はなく、見るもおそろしい大蛇となつて、「わしは、諏訪神社の神霊じゃ。あそこに見える山は、七尾七谷〈ななおなたに〉と見受ける。ながめもよいので、わしは、いついつまでも、あの山に鎮まりたい〈しずまりたい〉。」

声とともに姿は消えてしまいました。与惣九郎は、さっそく、お告げ〈おつげ〉のとおり、岡屋の富〈とみ〉の山を開き、清めて、そこにいただいてきた分霊をおまつりしました。

そのときです。天地〈あめつち〉がにわかにな、ゴオー、ガタガタ、と振動〈しんどろ〉し、ピカア、ゴロゴロ、とはげしい雷雨〈らいう〉がとどろくと共に、大きな蛇体〈じゃたい〉が富の山の七尾七谷をとりまき、雲つくような桧〈ひのき〉の根っこの穴から、大蛇の頭が半分でている姿がはっきり見られました。

「わしは、子どもがすきじゃ。安産させよう。」という、おごそかな声が聞こえたので、与惣九郎は、はっとわれにかえると、空はすっかり晴れわたり、なんともいえぬ神々しさが、山いっぱいにみちみちていました。



それから、誰いうともなく、諏訪さんのご神体は蛇体であるといわれ、そのために諏訪神社は長い間（明治三十七年まで）社殿を作らず、桧の古株にしめなわをかけて、これをご神体としておがんでいました。

それに、むかしは、祭の日になると、どこからともなく一匹の太った大猪〈いのしし〉がやってきて、みずから供物〈くもつ〉になったということです。

